

Explaining EXPLAIN 第2回

第20回しくみ+アプリケーション勉強会
(2011年6月4日)

PostgreSQLしくみ分科会
中西 剛紀

Explaining → プラン演算子

演算子	関連処理	始動コスト
Seq Scan	表スキャン	無
Index Scan	索引スキャン	無
Bitmap Index Scan		有
Bitmap Heap Scan		有
Subquery Scan	副問合せ	無
Tid Scan	ctid = ...	無
Function Scan	関数スキャン	無
Nested Loop	結合	無
Merge Join	結合	有
Hash Join	結合	有
Sort	ORDER BY	有
Hash		有

演算子	関連処理	始動コスト
Result	関数スキャン	無
Unique	DISTINCT UNION	有
Limit	LIMIT OFFSET	有
Aggregate	count, sum, avg, stddev	有
Group	GROUP BY	有
Append	UNION	無
Materialize	副問合せ	有
SetOp	INTERCEPT EXCEPT	有

Seq Scan 演算子：例題

```
=# EXPLAIN SELECT oid FROM pg_proc;  
      QUERY PLAN
```

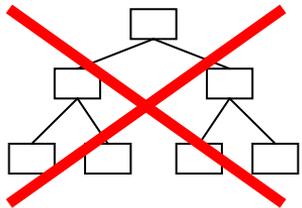
```
Seq Scan on pg_proc  
  (cost=0.00..87.47 rows=1747 width=4)
```

- 最も基本。単に表を最初から最後へとスキャンする
- 条件にかかわらず各行をチェックする
- 大きなテーブルはインデックススキャンの方が良い
- コスト(開始コスト無し), 行(タプル), 幅(oid)
- トータルコストは 87.47

Seq Scan について

- テーブルを最初から最後までチェックして必要な行を探す。
 - 検索条件に合致するインデックスがない場合はこれしかない。
 - インデックスが使えても対象行が多い場合は Seq Scan に。
- ⇒ オプティマイザがコスト計算した結果を比較して判断する。

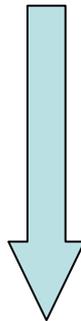
id列のインデックス



使わない

テーブル

id = 1
id = 11
id = 34
id = 45
...



先頭行から順に走査
(最後の行まで見る必要あり)

Seq Scan のコスト

$$\begin{aligned} &= \text{DISK I/O コスト} + \text{CPU コスト} \\ &= \text{テーブル全ページ数} \times \text{sequential_page_cost} \\ &\quad + \text{テーブル全行数} \times \text{cpu_tuple_cost} \\ &\quad + \text{テーブル全行数} \times \text{cpu_operator_cost} \end{aligned}$$

- テーブル全ページ数 pg_class の relpages
- テーブル全行数 pg_class の reltuples
- シーケンシャルにDISK1ページを読むコスト
sequential_page_cost = 1
- 1行を走査するCPUコスト
cpu_tuple_cost = 0.01
- 計算1回のCPUコスト (条件絞りこみ)
cpu_operator_cost = 0.0025

Index Scan 演算子

```
=# EXPLAIN SELECT oid FROM pg_proc WHERE oid=1;  
      QUERY PLAN
```

Index Scan using pg_proc_oid_index on pg_proc
(cost=0.00..5.99 rows=1 width=4)

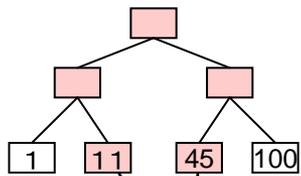
Index Cond: (oid = 1::oid)

- Index Condが無い場合は、ソートの代わりとして使われるインデックス順のフルスキャンを表す

Index Scan について

- 検索条件に合致するインデックスがあれば検討する。
- 通常は対象行が少なければこちらが選択される。
- インデックスとテーブルを交互にアクセスする。

id列のインデックス



検索条件に合う
リーフノードを探索

テーブル

id = 1
id = 11
id = 34
id = 45
...

必要な行に
ランダムアクセス

※
アクセスページがメモリサイズ
(effective_cache_size)の
何倍かでアクセスコストは変化

Index Scan のコスト

= インデックスI/Oコスト + テーブルI/Oコスト
+ インデックスCPUコスト + テーブルCPUコスト

インデックスI/Oコスト

= 必要ページ数 × sequential_page_cost(1)

テーブルI/Oコスト

= 必要行数 × (1~4) ※

インデックスCPUコスト

= 必要行数 × cpu_index_tuple_cost(0.005)

テーブルCPUコスト

= 必要行数 × cpu_tuple_cost(0.01)

必要行数って何？

- 指定条件を満たす行数
- Explain の実行結果で「rows=100」とか表示される値。
- プランナがテーブルの統計情報から行数を予測。
⇒ 実際に検索した時の行数とは異なる。
- 必要行数 = 選択度 × テーブル行数

- 「選択度」は対象カラムの統計情報を使って計算
- 各カラム値の分布は pg_stats (pg_statistic) でわかる。
⇒ ANALYZE時に収集した情報が格納されている。

選択度の計算

- 計算方法は2通り。
- テーブル内で多く出現(重複)する値を条件指定した場合
Common値(MCV: Most Common Values)

```
# SELECT most_common_vals, most_common_freqs FROM pg_stats
WHERE tablename='tenk1' AND attname='stringu1';

most_common_vals | {EJAAAA,BBAAAA,CRAAAA,FCAAAA,FEAAAA,
                        GSAAAA,JOAAAA,MCAAAA,NAAAAA,WGAAAA}
most_common_freqs | {0.00333333,0.003,0.003,0.003,0.003,0.003,0.003,0.003,0.003,0.003}
```

出現数/テーブル行数

※PostgreSQL 9.0.3 のマニュアル第56章の例を引用

- 実際にその値が入っている行の出現頻度が分かっているので、そのまま使用する。

上記の例でテーブルtenk1の全行数を1000件とすると、
「Stringu1='MCAAAA」の行数は「 $1000 \times 0.003 = 3$ 」行と推測できる。

選択度の計算

- Common値以外の値を条件指定した場合
- 一致検索 (WHERE stringu1 = 'IAAAA')
選択度 = MCV値を除いた行数 / カーディナリティ
⇒ MCV値以外はテーブル内に均等に出現すると仮定。
- 範囲検索 (WHERE stringu1 < 'IAAAA')
MCV値以外のヒストグラムを利用

```
# SELECT histogram_bounds FROM pg_stats  
WHERE tablename='tenk1' AND attname='stringu1';
```

```
          histogram_bounds
```

```
-----  
{AAAAAA,CQAAAA,FRAAAA,IBAAAA,KRAAAA,NFAAAA,PSAAAA,SGAAAA,  
VAAAAA,XLAAAA,ZZAAAA}
```

各帯のサンプル数が均一化
されるように帯幅を調整

※PostgreSQL 9.0.3 のマニュアル第56章の例を引用

- 指定範囲に含まれるMVC値の選択度と、
ヒストグラムから導出した非MVC値の選択度を加える。

Bitmap Scan 演算子

```
test=# EXPLAIN SELECT * FROM q3c, q3c as q3cs
      WHERE (q3c. ipix >= q3cs. ipix - 3 AND q3c. ipix <= q3cs. ipix + 3)
      OR (q3c. ipix >= q3cs. ipix - 1000 AND q3c. ipix <= q3cs. ipix - 993);
      QUERY PLAN
```

Nested Loop

- > Seq Scan on q3c q3cs
- > Bitmap Heap Scan on q3c
- > BitmapOr
 - > Bitmap Index Scan on ipix_idx
 - > Bitmap Index Scan on ipix_idx

- 8.1で追加された
- BitmapOr, BitmapAnd で複数のビットマップを合体
- リレーションの”ビットマップ“をメモリ内で作成する

Bitmap Scan について

- インデックスを有効に使って検索効率を向上させる機構
- ORで結合した条件式を使った検索に効果大

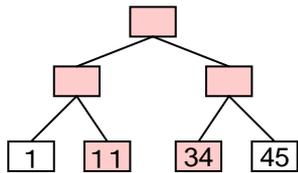
WHERE (id1 BETWEEN 10 AND 40) OR (id2 BETWEEN 20 AND 70)

Bitmap Index Scan

BitmapOr

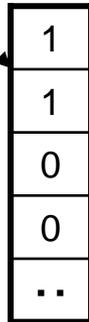
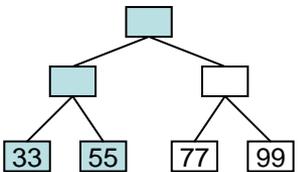
Bitmap Heap Scan

id1列のインデックス



条件を満たす行(TID)を
ビットマップとして生成

id2列のインデックス



ビットマップ
同士でOR演算



テーブル

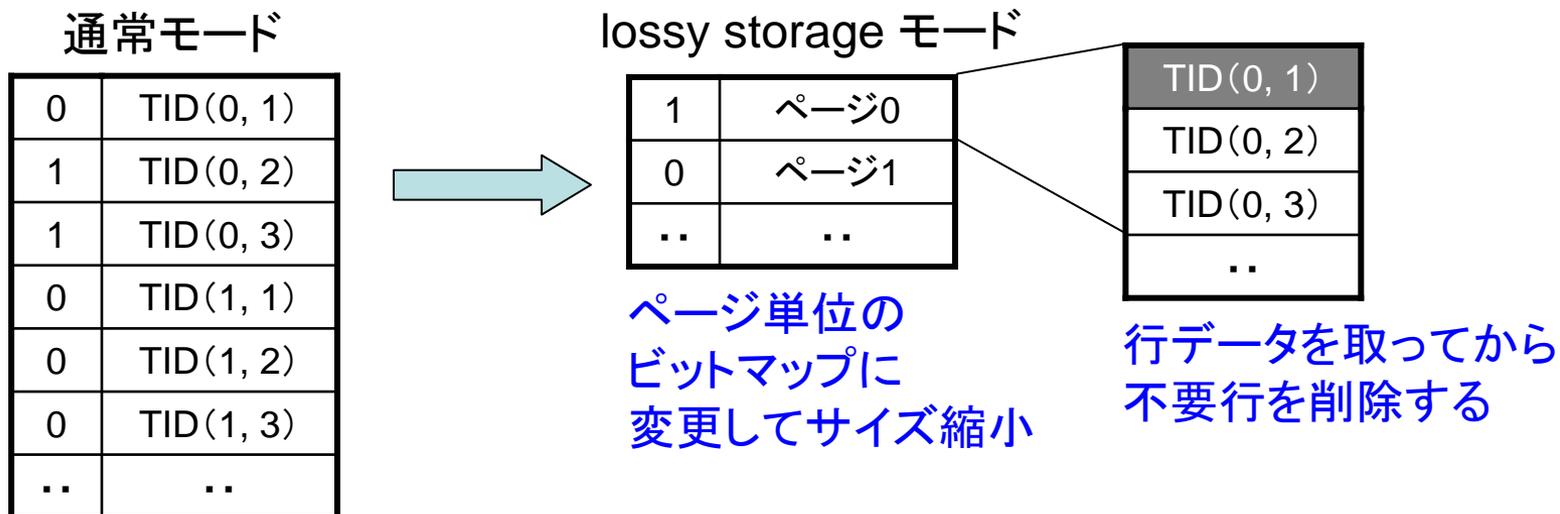
1	id1 = 1, id2 = 33
1	id1 = 11, id2 = 55
1	id1 = 34, id2 = 77
0	id1 = 45, id2 = 99
...	...

ビットONの行を取得

同一ページ内に複数の対象行がある場合、まとめて取得できるので、I/Oコストが有利になる。

work_mem と lossy storage

- ビットマップは作業メモリ(work_mem)上に作成する。
- 通常、ビットマップには行の位置を表すTIDを持つ。
 - work_mem = 1MB で 500万行ほどしか持てない。
- work_mem に収まらないサイズの場合、lossy storage モードへ移行してビットマップサイズを縮小
 - 1行を1ビットで表現 ⇒ 1ページを1ビットで表現 (1MBで64GBまでOK)
 - 取得データから条件を満たさないデータを排除するコストが必要



Tid Scan 演算子

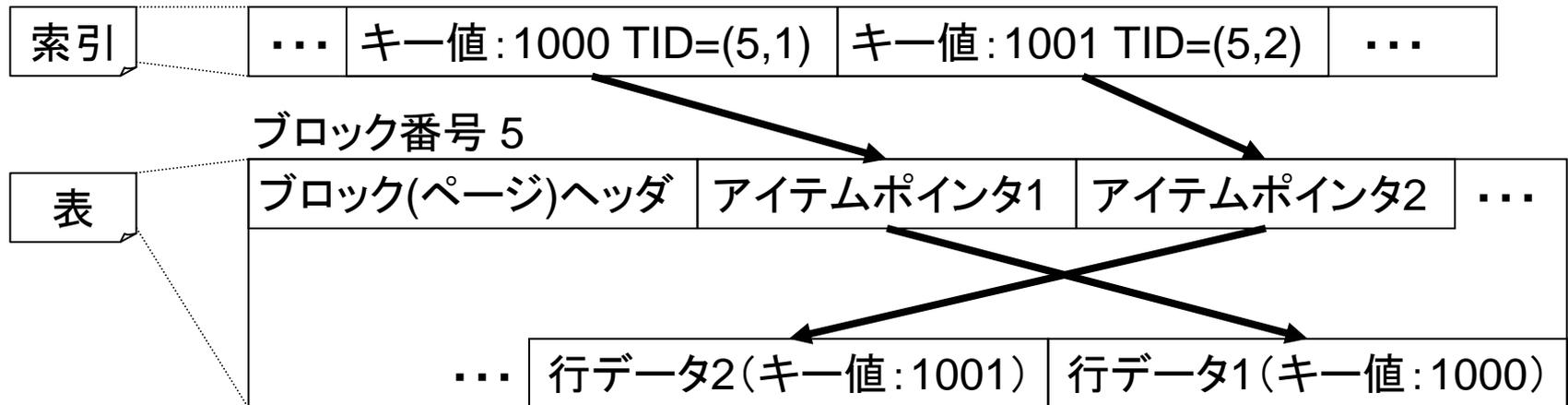
```
=# EXPLAIN SELECT oid FROM pg_proc WHERE ctid = ' (0, 1) ' ;  
      QUERY PLAN
```

```
-----  
Tid Scan on pg_proc (cost=0.00..4.01 rows=1 width=4)  
  Filter: (ctid = ' (0, 1) '::tid)
```

- カラムタプルID
- “ctid=”がクエリに指定された場合のみ使われる
- 滅多に使わない、非常に速い

TIDとは

- システムによって暗黙的に定義されたシステム列。
- 行データの位置(格納ブロック, アイテムポインタ位置)を示す。



TIDを1つ指定して検索する場合のコスト:

$$\text{random_page_cost}(4.00) + \text{cpu_tuple_cost}(0.01) = 4.01$$

ただし、行のctidはレコードが更新されたり、VACUUM FULLで移動させられると変わるので、直接TIDを指定して検索するケースは少ないと思われる。

Nested Loop 演算子

```
=# SELECT * FROM pg_foo JOIN pg_namespace  
    ON (pg_foo.pronamespace=pg_namespace.oid);
```

QUERY PLAN

Nested Loop (cost=1.05..39920.17 rows=5867 width=68)

Join Filter: ("outer".pronamespace = "inner".oid)

-> Seq Scan on pg_foo (cost=0.00..13520.54 rows=234654 width=68)

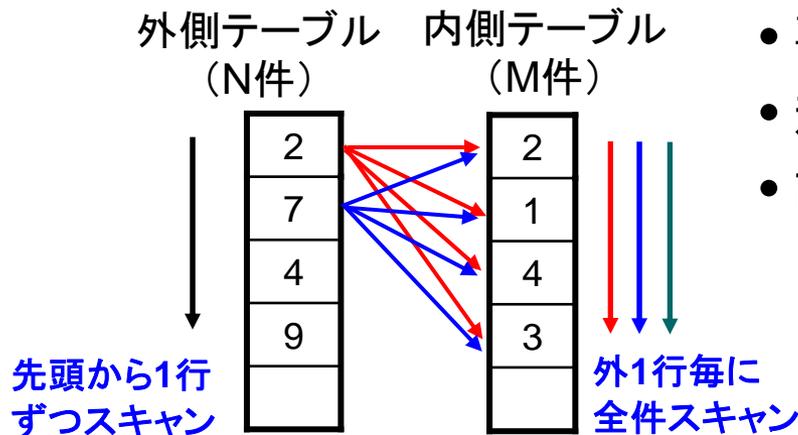
-> Materialize (cost=1.05..1.10 rows=5 width=4)

-> Seq Scan on pg_namespace (cost=0.00..1.05 rows=5 width=4)

- 2つのテーブルの結合(2つの入力セット)
- INNER JOIN と LEFT OUTER JOIN の使用
- 「外部」テーブルをスキャンし、「内部」テーブルにマッチするものの発見
- 開始コスト無し
- インデックスが無い場合遅い問い合わせになる可能性、特にselect句に関数がある場合

Nested Loop (入れ子ループ)

- 一番単純な結合方式
- 外側テーブル1行毎に内側テーブルを走査する。
- 外側テーブルの件数小&内側テーブルに結合キーのインデックスがあるケースに有効。



- 事前準備(初期コスト)は不要。
- 規模が大きくなるにしたがってコストは膨らむ。
- 計算量は $O(N \times M)$ 。

Merge Join 演算子

```
=# EXPLAIN SELECT relname,nspname FROM pg_class left join
    pg_namespace ON (pg_class.relnamespace = pg_namespace.oid);
QUERY PLAN
```

Merge Right Join (cost=14.98..17.79 rows=186 width=128)

Merge Cond: ("outer".oid = "inner".relnamespace)

-> Sort (cost=1.11..1.12 rows=5 width=68)

Sort Key: pg_namespace.oid

-> Seq Scan on pg_namespace (cost=0.00..1.05 rows=5 width=68)

-> Sort (cost=13.87..14.34 rows=186 width=68)

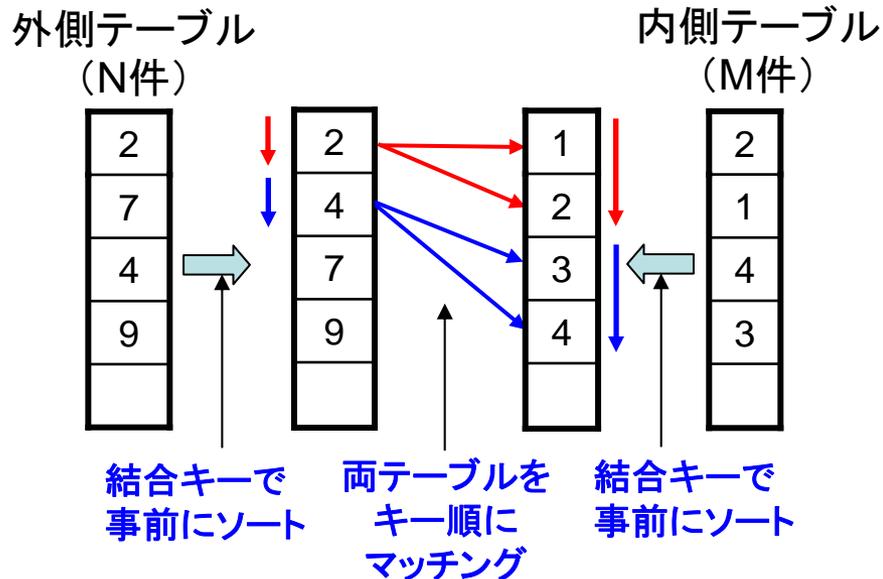
Sort Key: pg_class.relnamespace

-> Seq Scan on pg_class (cost=0.00..6.86 rows=186 width=68)

- 二つのデータセットをJOINする: outerとinner
- Merge Right JoinとMerge In Joinがある
- データセットはあらかじめソートされていなければならず、また両方同時に走査される。

Merge Join (ソートマージ)

- 事前に両方のテーブルを結合キーでソートする。
- 両方のテーブルを先頭からマッチングしていく。
- ⇒ テーブルを1回調べればよく、テーブルの走査回数減
- 処理対象の行が多いケースで有効



- ソートさえできれば速いが。。。⇒ インデックスがない列が結合キーの場合はコスト大。
- 計算量は $O(M \log N + M \log M)$ 。

Hash & Hash Join 演算子

```
=# EXPLAIN SELECT relname, nspname FROM pg_class JOIN  
    pg_namespace ON (pg_class.relnamespace=pg_namespace.oid);  
    QUERY PLAN
```

Hash Join (cost=1.06..10.71 rows=186 width=128)

Hash Cond: ("outer".relnamespace = "inner".oid)

-> Seq Scan on pg_class (cost=0.00..6.86 rows=186 width=68)

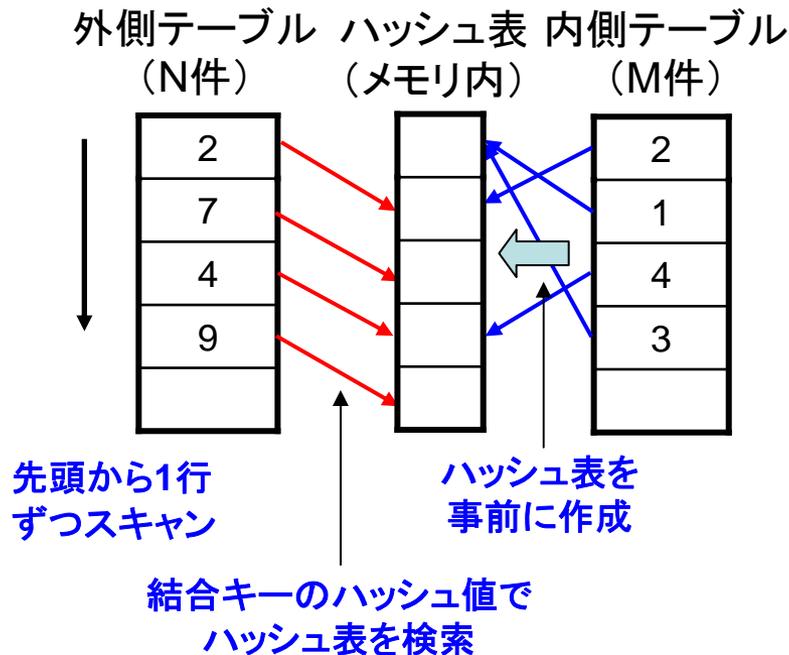
-> Hash (cost=1.05..1.05 rows=5 width=68)

-> Seq Scan on pg_namespace (cost=0.00..1.05 rows=5 width=68)

- Hashは、異なる Hash Join演算子で使われるハッシュテーブルを作成する
- 一方の入力からハッシュテーブルを作成し、二つの入力と比較する
- INNER JOIN、OUTER JOINと同時に使われる
- ハッシュの作成にはスタートアップコストが伴う

Hash Join (ハッシュ値マッチング)

- 事前に内側テーブルのハッシュ表を作成。
⇒ ハッシュ表を作成する初期コストが必要。
- 外側テーブルとハッシュ表を突き合わせる。
- ハッシュ表がメモリ(work_mem)に収まらないと性能劣化。



- 一度ハッシュ表を作ってしまったら、メモリ内で検索を行えるのでハッシュ表の検索は高速。
- 計算量のオーダーは $O(N+M)$ 。

Explain実行例

```
// accounts(100万件)、branches(10件)をJOIN。最初はHash Join を選択。  
# EXPLAIN SELECT * FROM accounts a INNER JOIN branches b ON a.bid = b.bid WHERE a.aid < 10000;
```

Hash Join (cost=**1.23..617.37** rows=10425 width=373)

Hash Cond: (a.bid = b.bid)

-> Index Scan using accounts_pkey on accounts a (cost=0.00..472.80 rows=10425 width=97)

Index Cond: (aid < 10000)

-> Hash (cost=1.10..1.10 rows=10 width=276)

-> Seq Scan on branches b (cost=0.00..1.10 rows=10 width=276)

accounts_pkey をインデックススキャンしながらハッシュ表とJOIN

branches を Seq Scan しながらハッシュ表作成

```
// Hash Joinを無効にするとMerge Joinを選択。(SET enable_hashjoin=off;)
```

```
# EXPLAIN SELECT * FROM accounts a INNER JOIN branches b ON a.bid = b.bid WHERE a.aid < 10000;
```

Merge Join (cost=**1740.32..1922.80** rows=10425 width=373)

Merge Cond: (b.bid = a.bid)

-> Sort (cost=1.27..1.29 rows=10 width=276)

Sort Key: b.bid

-> Seq Scan on branches b (cost=0.00..1.10 rows=10 width=276)

-> Materialize (cost=1739.05..1791.17 rows=10425 width=97)

-> Sort (cost=1739.05..1765.11 rows=10425 width=97)

Sort Key: a.bid

-> Index Scan using accounts_pkey on accounts a (cost=0.00..472.80 rows=10425 width=97)

Index Cond: (aid < 10000)

各ソート結果をJOIN。
(ほとんどbranchesのソートコスト)

bidでbranchesをソート

bidでaccountsをソート
(索引がなくて遅い)

aidで対象を絞り込み。

```
// さらに Merge Join も無効にすると(しかたなく) Nested Loop を選択。(SET enable_mergejoin=off;)
```

```
# EXPLAIN SELECT * FROM accounts a INNER JOIN branches b ON a.bid = b.bid WHERE a.aid < 10000;
```

Nested Loop (cost=**0.00..2037.67** rows=10425 width=373)

Join Filter: (a.bid = b.bid)

-> Index Scan using accounts_pkey on accounts a (cost=0.00..472.80 rows=10425 width=97)

Index Cond: (aid < 10000)

-> Materialize (cost=0.00..1.15 rows=10 width=276)

-> Seq Scan on branches b (cost=0.00..1.10 rows=10 width=276)

accounts はインデックスを使ってスキャン

branchesが外部表

Result 演算子

```
=# EXPLAIN SELECT oid FROM pg_proc WHERE 1+1=3;  
      QUERY PLAN
```

Result (cost=0.00..87.47 rows=1747 width=4)
One-Time Filter: false
-> Seq Scan on pg_proc
 (cost=0.00..87.47 rows=1747 width=4)

- 非テーブル問い合わせ
- テーブルを参照せずに結果が得られる場合

Sort 演算子

```
=# EXPLAIN SELECT oid FROM pg_proc ORDER BY oid;  
      QUERY PLAN
```

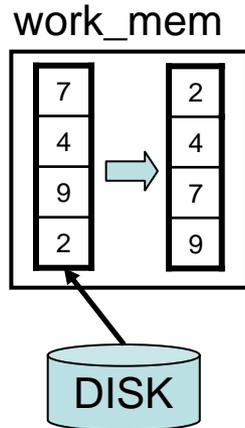
```
Sort (cost=181.55..185.92 rows=1747 width=4)  
  Sort Key: oid  
-> Seq Scan on pg_proc  
   (cost=0.00..87.47 rows=1747 width=4)
```

- 明示的なソート：ORDER BY句
- 暗黙的なソート：Unique, Sort-Merge Join など
- 開始コストを持っている: 最初の値はすぐには返却されない

Sort について

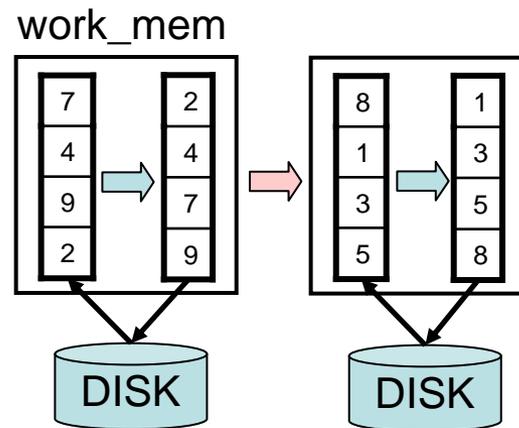
- データが作業メモリ(work_mem)に収まればクイックソート
 - DISK I/Oが発生しない。高速。
- 作業メモリに収まらなければ外部ソートを選択
 - アルゴリズムは「マージソート」
 - DISK I/Oが発生するのでクイックソートより低速。
 - I/Oコストは対象データと work_mem のサイズで変わってくる。
work_memに収まるサイズ毎にソートを繰り返すから。多分。。。
 - 詳しくは /src/backend/optimizer/path/costsize.c の cost_sort 参照。

【対象データ < work_mem】



- 対象データを全てメモリに保持
- メモリ上でクイックソートを実行

【対象データ > work_mem】



- 以下を繰り返す。
- データの一部をメモリに保持
- メモリ上でソート実行
- ソート結果をDISKに戻す

Sortの実行例

```
# EXPLAIN ANALYZE SELECT * FROM pgbench_accounts ORDER BY bid;
```

```
-----  
Sort (cost=290114.34..292614.34 rows=1000000 width=97)  
      (actual time=882.522..1186.626 rows=1000000 loops=1)
```

```
Sort Key: bid
```

```
Sort Method: external sort Disk: 104600kB
```

ソート対象が大きいのので外部ソート

```
-> Seq Scan on pgbench_accounts (cost=0.00..26394.00 rows=1000000 width=97)  
      (actual time=0.023..176.540 rows=1000000 loops=1)
```

```
Total runtime: 1264.377 ms
```

※ ログに一時ファイル作成状況を表示 (postgresql.conf の log_temp_files = 0)

```
LOG: temporary file: path "base/pgsql_tmp/pgsql_tmp32001.0", size 107110400  
STATEMENT: EXPLAIN ANALYZE SELECT * FROM pgbench_accounts ORDER BY bid;
```

※ work_mem を1⇒200MBに拡張して実行してみる

```
# SET work_mem='200MB';  
# explain analyze select * from pgbench_accounts order by bid;
```

```
-----  
Sort (cost=126051.84..128551.84 rows=1000000 width=97)  
      (actual time=472.334..563.570 rows=1000000 loops=1)
```

```
Sort Key: bid
```

```
Sort Method: quicksort Memory: 165202kB
```

メモリに収まったのでクイックソート

```
-> Seq Scan on pgbench_accounts (cost=0.00..26394.00 rows=1000000 width=97)  
      (actual time=0.030..166.788 rows=1000000 loops=1)
```

```
Total runtime: 634.155 ms
```

Unique 演算子

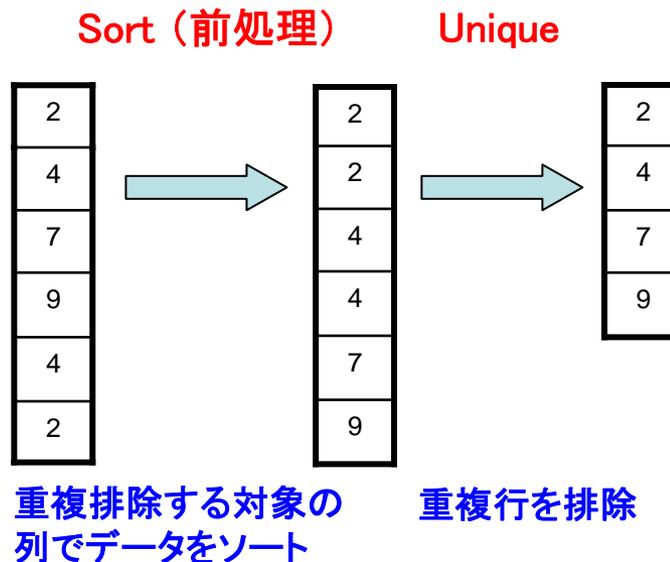
```
=# EXPLAIN SELECT distinct oid FROM pg_proc;  
      QUERY PLAN
```

```
Unique (cost=181.55..190.29 rows=1747 width=4)  
  -> Sort (cost=181.55..185.92 rows=1747 width=4)  
      Sort Key: oid  
  -> Seq Scan on pg_proc  
      (cost=0.00..87.47 rows=1747 width=4)
```

- 入力セットから重複する値を削除
- 行の並べ替えはせず、単に重複する行を取り除く
- 入力セットは予めソート済み (Sort演算子の後に行う)
- タプルコストごとに「CPU演算」×2
- DISTINCT と UNION で使用される

Unique演算子について

- 事前に対象データをソートする初期コストが必要。
- DISTINCT, UNION句で使用されるが、
実行コストによって HashAggregate 演算子と使い分け。
⇒ バージョン8.3まではこのプラン選択を行わなかったため、
「DISTINCTをGROUP BYに置き換える」チューニング作法があった。
⇒ バージョン8.4からはプランナが自動的に選択するようになった。



Unique演算子の実行例

```
// テーブル pgbench_tellers (100件) を DISTINCT 句付で SELECT  
# EXPLAIN SELECT DISTINCT tid FROM pgbench_tellers;  
QUERY PLAN
```

HashAggregate (cost=2.25..**3.25** rows=100 width=4)

-> Seq Scan on pgbench_tellers (cost=0.00..2.00 rows=100 width=4)

// HashAggregate を無効 (set enable_hashagg=off) にして実行してみる。

```
# EXPLAIN SELECT DISTINCT tid FROM pgbench_tellers;  
QUERY PLAN
```

Unique (cost=5.32..**5.82** rows=100 width=4)

-> **Sort** (cost=5.32..**5.57** rows=100 width=4)

Sort Key: tid

Sort Method: quicksort Memory: 29kB

-> Seq Scan on pgbench_tellers (cost=0.00..2.00 rows=100 width=4)

Total runtime: 0.153 ms

ソートのコストが大部分を占めている

Aggregate 演算子

```
=# EXPLAIN SELECT count(*) FROM pg_proc;  
          QUERY PLAN
```

Aggregate (cost=91.84..91.84 rows=1 width=0)

-> Seq Scan on pg_proc (cost=0.00..87.47 rows=1747 width=0)

- count, sum, min, max, avg, stddev, varianceを使用
- GROUP BY 使用の場合差異が認められることがあります

```
=# EXPLAIN SELECT count(oid), oid FROM pg_proc GROUP BY oid;  
          QUERY PLAN
```

HashAggregate (cost=96.20..100.57 rows=1747 width=4)

-> Seq Scan on pg_proc (cost=0.00..87.47 rows=1747 width=4)

GroupAggregate 演算子

```
=# EXPLAIN SELECT count(*) FROM pg_foo GROUP BY oid;  
QUERY PLAN
```

```
GroupAggregate (cost=37442.53..39789.07 rows=234654 width=4)  
  -> Sort (cost=37442.53..38029.16 rows=234654 width=4)  
      Sort Key: oid  
        -> Seq Scan on pg_foo (cost=0.00..13520.54 rows=234654 width=4)
```

- GROUP BYを使用し、より大きな結果セット上に集約を行う

Aggregate演算子

- 複数の行を1行に集約する処理を行う。
 - GROUP BY & 集約関数(COUNT, SUM, MAX, MIN)
- Aggregate演算子
 - 単純な集約処理。COUNT(*) とか。
 - CPUコスト = `cpu_operator_cost (0.0025)` × 行数
- GroupAggregate演算子
 - 事前に対象データをソートする初期コストが必要
 - HashAggregateに比べて低速なケースが多い。
- HashAggregate演算子
 - バージョン7.4より実装。
 - メモリ中にハッシュ表を作成する。高速。
 - 対象データが作業メモリ(`work_mem`)内に収まる必要がある。
⇒ 収まらなかったら GroupAggregate を選択する。

Aggregate演算子の実行例

```
// work_mem を1MBにした状態で実行
```

```
# SET work_mem='1MB';
```

```
# EXPLAIN ANALYZE SELECT MAX(aid) FROM pgbench_accounts GROUP BY aid ;
```

100万件。Indexなし

```
-----  
GroupAggregate (cost=153400.84..173400.84 rows=1000000 width=4)
```

```
(actual time=1560.972..2443.050 rows=1000000 loops=1)
```

```
-> Sort (cost=153400.84..155900.84 rows=1000000 width=4)
```

```
(actual time=1560.964..1834.340 rows=1000000 loops=1)
```

```
Sort Key: aid
```

```
Sort Method: external sort Disk: 13688kB
```

メモリが小さいと GroupAggregate を選択

```
-> Seq Scan on pgbench_accounts (cost=0.00..26394.00 rows=1000000 width=4)
```

```
(actual time=0.025..271.043 rows=1000000 loops=1)
```

```
Total runtime: 2550.199 ms
```

```
// work_mem を100MBに広げて実行
```

```
# SET work_mem='100MB';
```

```
# EXPLAIN ANALYZE SELECT MAX(aid) FROM pgbench_accounts GROUP BY aid ;
```

ハッシュ表がメモリに収まれば
HashAggregate を選択

```
-----  
HashAggregate (cost=31394.00..43894.00 rows=1000000 width=4)
```

```
(actual time=873.753..1306.733 rows=1000000 loops=1)
```

```
-> Seq Scan on pgbench_accounts (cost=0.00..26394.00 rows=1000000 width=4)
```

```
(actual time=0.050..182.630 rows=1000000 loops=1)
```

```
Total runtime: 1410.079 ms
```

Limit 演算子

```
=# EXPLAIN SELECT oid FROM pg_proc LIMIT 5;  
      QUERY PLAN
```

Limit (cost=0.00..0.25 rows=5 width=4)

-> Seq Scan on pg_proc

(cost=0.00..87.47 rows=1747 width=4)

- 行は指定された数に等しい
- 最初の行を即時に返す
- 少量の開始コスト追加でオフセットの扱いも可

```
=# EXPLAIN SELECT oid FROM pg_proc LIMIT 5 OFFSET 5;  
      QUERY PLAN
```

Limit (cost=**0.25**..0.50 rows=5 width=4)

-> Seq Scan on pg_proc

(cost=0.00..87.47 rows=1747 width=4)

Limit演算子の実行例

```
# EXPLAIN SELECT aid FROM pgbench_accounts LIMIT 10; ... (A)
```

Limit (cost=0.00..0.26 rows=10 width=4)

-> Seq Scan on pgbench_accounts (cost=0.00..26394.00 rows=1000000 width=4)

```
# EXPLAIN SELECT aid FROM pgbench_accounts LIMIT 10 OFFSET 10; ... (B)
```

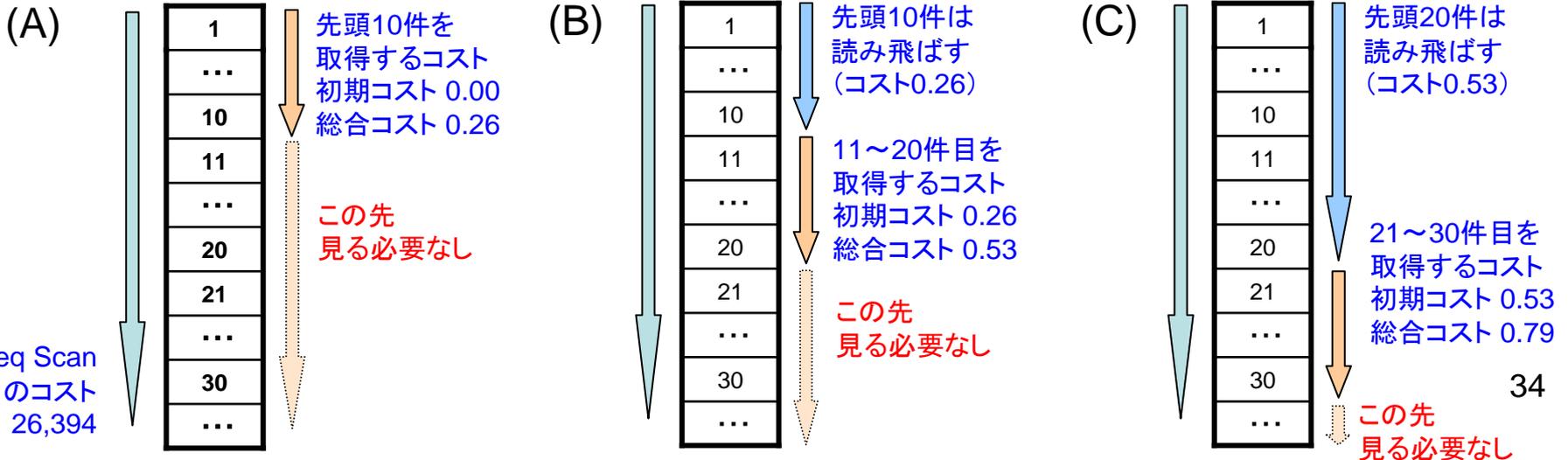
Limit (cost=0.26..0.53 rows=10 width=4)

-> Seq Scan on pgbench_accounts (cost=0.00..26394.00 rows=1000000 width=4)

```
# EXPLAIN SELECT aid FROM pgbench_accounts LIMIT 10 OFFSET 20; ... (C)
```

Limit (cost=0.53..0.79 rows=10 width=4)

-> Seq Scan on pgbench_accounts (cost=0.00..26394.00 rows=1000000 width=4)



Limit演算子の実行例

```
# EXPLAIN SELECT aid FROM pgbench_accounts ORDER BY aid LIMIT 10;
```

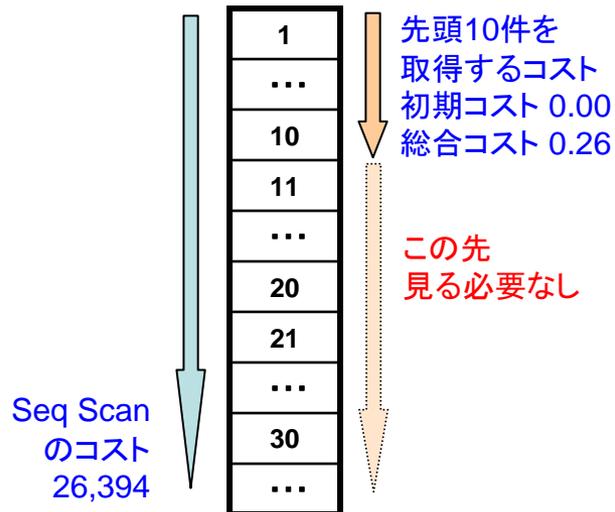
```
-----  
Limit (cost=48003.64..48003.67 rows=10 width=4)
```

```
-> Sort (cost=48003.64..50503.64 rows=1000000 width=4)
```

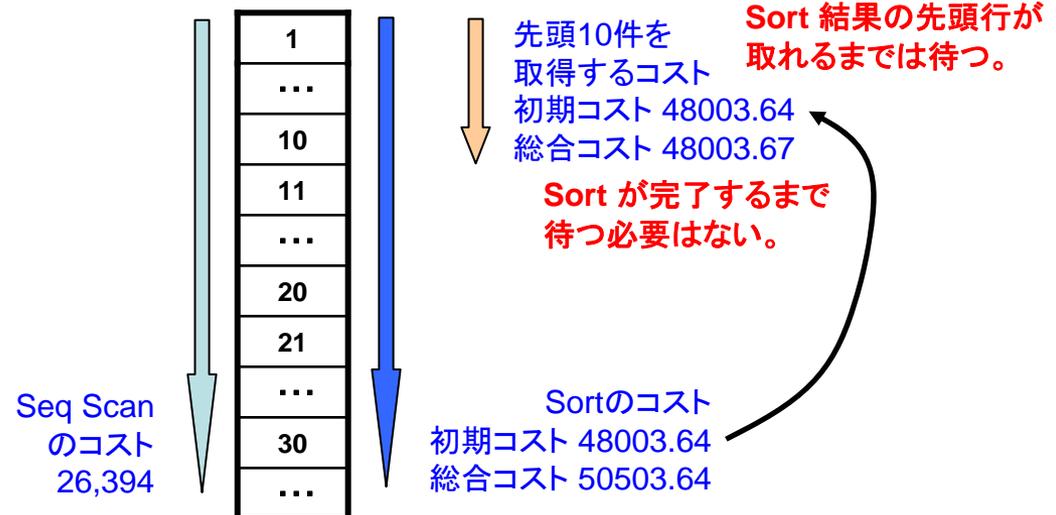
```
Sort Key: aid
```

```
-> Seq Scan on pgbench_accounts (cost=0.00..26394.00 rows=1000000 width=4)
```

(ORDER BYなし)



(ORDER BYあり)



Append 演算子

```
=# EXPLAIN SELECT oid FROM pg_proc  
   UNION ALL SELECT oid ORDER BY pg_proc;  
      QUERY PLAN
```

Append (cost=0.00..209.88 rows=3494 width=4)

-> Seq Scan on pg_proc (cost=0.00..87.47 rows=1747 width=4)

-> Seq Scan on pg_proc (cost=0.00..87.47 rows=1747 width=4)

- UNION (ALL) によるトリガー, 継承
- 開始コスト無し
- コストは単に全ての入力の合計

Function Scan 演算子

```
=# CREATE FUNCTION foo(integer) RETURNS SETOF integer AS
  $$
    select $1;
  $$
LANGUAGE sql;
```

```
=# EXPLAIN SELECT * FROM foo(12);
      QUERY PLAN
```

Function Scan on foo (cost=0.00..12.50 rows=1000 width=4)

- 関数がデータをgatherするときに出てくる
- トラブルシューティングの観点からは若干ミステリアス
- 関数の中で使われているクエリについてexplainを走らせるべき

SetOp 演算子

```
=# EXPLAIN SELECT oid FROM pg_proc INTERSECT SELECT oid FROM pg_proc;
      QUERY PLAN
```

SetOp Intersect (cost=415.51..432.98 rows=349 width=4)

→ Sort (cost=415.51..424.25 rows=3494 width=4)

Sort Key: oid

→ Append (cost=0.00..209.88 rows=3494 width=4)

→ Subquery Scan "*SELECT* 1" (cost=0.00..104.94 rows=1747)

→ Seq Scan on pg_proc (cost=0.00..87.47 rows=1747)

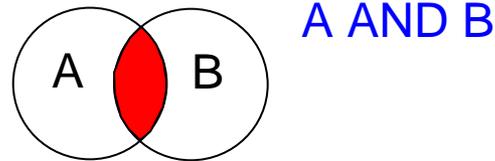
→ Subquery Scan "*SELECT* 2" (cost=0.00..104.94 rows=1747)

→ Seq Scan on pg_proc (cost=0.00..87.47 rows=1747)

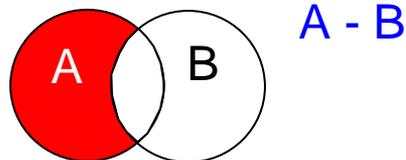
- INTERSECT, INTERSECT ALL, EXCEPT, EXCEPT ALL句のために使用される
 - SetOp Intersect, Intersect All, Except, Except All

INTERSECT, EXCEPT

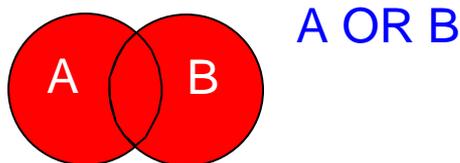
- INTERSECT: 両方の問い合わせ共通の行だけを返す。



- EXCEPT: 最初の結果集合にあり、
2番目の結果集合にない行だけを返す。



- UNION: 両方の結果集合に存在する行と、
片方の結果集合に存在する行を返す。



実行プランの強制

- SET enable_演算子 = off;
 - プランナーがある演算子を使おうとするのを「強く思いとどまらせる」ことができる
 - SETを行ったセッションのみに影響する
- Planner Method Configuration (on/off)
 - enable_bitmapscan
 - enable_hashagg
 - enable_hashjoin
 - enable_indexscan
 - enable_mergejoin
 - enable_nestloop
 - enable_seqscan
 - enable_sort
 - enable_tidscan

Seq Scan の強制

```
=# EXPLAIN SELECT * FROM pg_class;  
          QUERY PLAN
```

```
Seq Scan on pg_class  
(cost=100000000.00..100000006.86 rows=186 width=164)
```

- 始動コストに 1000000000.0 を足すだけ
 - /src/backend/optimizer/path/costsize.c

スキヤン強制, プランを変える

```
=# EXPLAIN ANALYZE SELECT * FROM pg_class WHERE oid > 2112;  
      QUERY PLAN
```

```
Seq Scan on pg_class  
  (cost=0.00..7.33 rows=62 width=164)  
  (actual time=0.087..1.700 rows=174 loops=1)  
  Filter: (oid > 2112::oid)  
Total runtime: 2.413 ms
```

```
=# SET enable_seqscan = off;
```

```
=# EXPLAIN ANALYZE SELECT * ORDER BY pg_class WHERE oid > 2112;  
      QUERY PLAN
```

```
Index Scan using pg_class_oid_index on pg_class  
  (cost=0.00..22.84 rows=62 width=164)  
  (actual time=0.144..1.802 rows=174 loops=1)  
  Index Cond: (oid > 2112::oid)  
Total runtime: 2.653 ms
```

心掛けるべきこと

- プランの強制は開発時にはよいが、製品には不適
 - やむを得ず使う場合は SET LOCAL で設定すること。
トランザクション完了時に元の設定に戻すように。
- (Tom Lane でもない限り) 人はプランナーより賢くない
- 他方では、プランナーは推測しからない
 - 統計情報を正しい状態に保つため定期的な ANALYZE を。
autovacuum に任せるのが一番確実。
 - 環境に合わせてコスト変数 (Planner Cost Constants) を適切に設定することが重要 例えば random_page_cost (デフォルト=4) はもっと小さくてもいいかも。。
- 可能なときには、explain analyze を使いなさい

参考文献

- 問合せ最適化インサイド
 - 「とことんわかるPostgreSQLインサイド」講演資料。フォルシア板垣さん
 - オプティマイザの動作について詳細解説。[パタリ](#)参考にしまくり。
- PostgreSQLソースコードの読み方～vi+ctags,gdb,strace～
 - JPUGしくみ分科会第2回勉強会資料。NTTデータ先端技術 井久保さん
 - この資料でPostgreSQLのソースをデバッグできるようになりました。
- 内部を知って業務に活かす PostgreSQL研究所
第1回 PostgreSQLの構造と機能、第4回,第5回 プラン処理
 - WEB+DB PRESS連載。SRA OSS日本支社 石井さん
- PostgreSQL完全機能リファレンス(書籍)
 - InterDB 鈴木さん